

『藤野先生』と藤野巖九郎（三）

葛 谷 登

一

「藤野先生」の冒頭は次の文で始まる。

東京也無非是這樣。⁽⁷⁰⁾

これに対して、竹内好訳は「東京も格別のことはなかった。⁽⁷¹⁾」、高橋和巳訳は「東京も格別のことはなかった。⁽⁷²⁾」、立間祥介訳は「東京も同じことだった。⁽⁷³⁾」、駒田信二訳は「東京も同じようではなかった。⁽⁷⁴⁾」となっている。

魯迅の原文は「東京」という語の後に累加の助詞「也」が用いられており、「是」の前には二重否定を示す語句「無非」が冠せられている。また、「是」の後ろには先行する文がないままいきなり「このようだ」という意味の指示形容詞「這樣」が来ている。これらは自らの意識の中で了解事項をめぐって思考の往還運動が際限なく繰り返されていることを感じさせる極めて難解な措辞である。劈頭に何を置くか、作家が考えに考え抜いた結果、搾り出された表現がここにはあるようだ。「也」、「無非」と「這樣」の三語がこの文章の内側に奥行きと広

がりを生み出す。

まず「也」という語について見てみたい。この語は「故郷」の結びの部分でも登場する。

我在朦朧中、眼前展開一片海辺碧綠的沙地來、上面深藍的天空中拄着一輪金黃的圓月。我想：希望是本無所謂、無所謂無的。這正如地上的路；其實地上本沒有路、走的人多了、也便成了路（傍点、筆者注。以下、特に注記せぬ限り、同じ）。

まず「也」が登場する文に先行する文から見てみたい。

「我想、希望是本無所謂有、無所謂無的。」の箇所に対して、竹内訳は「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえぬし。」⁽¹⁶⁾、高橋和巳訳は「私は思う。希望というものは本来あるともいえぬし、ないともいえぬし。」⁽¹⁷⁾、丸山昇訳は「私は思った、希望とは元来あるとも言えぬし、ないとも言えぬものだ。」⁽¹⁸⁾、駒田信二訳は「わたしは思う。希望というものは、もともとあるともいえぬし、ないともいえぬものである。」⁽¹⁹⁾である。

「無所謂」という語は文語的響きを有する言い回しである。商務印書館の『古今漢語詞典』は第一に「不在乎；没有關係。」⁽²⁰⁾という語義を挙げ、第二に「談不上。」⁽²¹⁾という語義を挙げている。ここでは第二のものが該当するであろう。その場合、主題とされることならについてなにがしかを言い切ることが難しいほどの意味となるであろうか。

「無所謂有、無所謂無」の部分について、如上の既訳は、竹内訳が有るものとも無いものとも言えないと解しているに比し、後三者は有るとも無いとも言えないと解している。これらの訳を見る限り、原文は二項対立のた

いそう平易なことを語っているように見える。原文と訳文との間に隔たりが生ずるのはいつの場合も避けられないことと思われるが、この場合もう少し踏み込んで訳すことの出来る余地が残されているのではないであろうか。わたくしはこの「無所謂有、無所謂無」については、有るということや無いということについて判断を回避する立場に立つことを示すものとして解してみたい。従つて「希望是本無所謂有、無所謂無的。」の箇所は、「希望とは本来的に『有』であると断定することの出来ぬものであり、他方『無』であると断定することの出来ぬものなのである。」というふうに思い切つて訳すことは出来ないであろうか。要するに、この文は希望とはまず理念の次元で存在するものであり、次にこれを現実の次元に具体化させることは個人の主体的な関与を要すること、そのような主体的な心組が形成されて初めて希望は理念の世界に於て現実の世界に向けての躍動力を獲得することを言い表そうとしているのではないであらうか。

この文の次に続く、「這正如地上的路」という句は、「このことはいみじくも地上の道に例えられる、」というふうに解することが出来るものであり、四つの既訳も大差ない。ただ興味深いのは四つとも「這」を中称の「それ」に訳していることのみである。そして「也」が用いられた「其実地上本没有路、走的人多了、也便成了路。」という文が列なる。この箇所について、竹内訳は「もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」⁽⁸³⁾、高橋訳は「實際地上にはもともと道はなかつたのであり、歩む人が多くなれば、おのずと路になるもののだ。」⁽⁸⁴⁾、丸山訳は「じつは地上にはもともと道はない、歩く人が多くなれば、道もできるのだ。」⁽⁸⁵⁾、駒田訳は「實際地上にはもともと道はないのだ。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」⁽⁸⁶⁾である。この中で累加の意味を示す「也」を訳文の中に表わしているのは独り丸山訳のみである。

まず出だしの「其实」の訳について些か考えてみたい。というのも「本」という語は本来のことから述べるのに用いられる副詞であろうから、その上に置かれた「其实」が「實際」であるとか、「じつは」であるとかというような現実的なことがらを示す語と考えると噛み合わせがよくないのではないかと感ぜられるからである。

この前の句「這正如地上的路：」の中の「地上的路」は *Dasem* 現実の次元のもの、「有」である。この眼前に展開する「地上的路」は *Sein* 存在の次元から見れば「本没有路」となり、「無」である。「這正如地上的路」は現象世界のことからであるのに比し、「地上本没有路」というのは本質世界のこととを指しているのではないか。してみれば、「其实」は両者の文の關係を指す語として取れないであろうか。つまり、前後で現象世界と本質世界が対置されているのである。してみれば「其实」は逆接の辞と捉えることが許されるのではないか。希望とはあたかも眼前に広がる地上の道のようにであると書いた後で、しかし地上には本来の意味での道は存在しないことを述べているのである。⁽⁶⁾

次にこの段落の最後の部分の「走的人多了、也便成了路。」について見てみたい。この句は「了…、便…」という形式から見て完了の相を有する仮定の文であると思われる。「也」を取って訳してみると、「歩く人が多くなつたならば、道が出来上がるであろう。」とはならないであろうか。丸山訳は「也」を帰結節にかけているように見える。わたくしは条件節にかけてみたい。そうすると、この箇所は「歩く人が多くなつたならば、その場合も道が出来上がるであろう。」というような意味にならないであろうか。

これはどういふことであろうか。歩く人が多くなくとも道は出来るということが前提となっている。というのも道は自分以外の他者によつて造られて、すでにそこにあるものだからである。この他者に労役を課する者は民

衆を支配する為政者である。前近代の中国においてこの為政者が民衆に労役を課して道を造る。その工事には目的があった。その目的は為政者を利するものであって、民衆を利するものではなかった。民衆は自らの生存を脅かしかねない目的の実現のために強制的に労役に従事させられたのである。

魯迅が「也」という語をもって指し示す道はそのような道ではない。民衆が自らの意思によって歩いたあとに出来る道である。歩くといってもあてどなく彷徨うのではない。自ら或る場所を目指して歩くのである。多くの人が同じ目的地を目指して歩くとき、地は踏み固められて、自ずとそこに道が出来るのである。この目的地が希望なのであるか。希望は多くの人々に抱かれるとき初めて実現への道筋が現われ出よう。強いられてではなく、個人が自ら進んで或る目標に向かって荒れ野に踏み入って行くとき、その歩みは、共同性を帯びたものになって行く。闇黒の絶望的な現実の中にあつて未来から射し込む希望の光を頼りに前に向かって歩いて行くのである。

為政者は体制を維持するために諸制度を拵える。被支配者としての民衆は絶対君主の統治に奉仕する制度に縛られそれに従わさせられる。前近代の体制は身分制社会である。民衆はそのような体制を具現化する制度の枠に締めつけられて身悶えする。彼らはまだ現実のものとして可視化されてはいない近代の体制としての、身分制を原理的に否定するという意味での平等な市民社会を無限遠点に見据える。その体制は民衆が客体ではなく主体として自由意思に基づいて行動するための新たな制度を骨格とする。民衆はそのような平等な社会体制を目指して足を引き摺りながら荒れ野を突き進んで行く。そのときもまた道が出来る。このことを言い表わすべく「也」が用いられている。こう考えるのもあながち付会とは言えないのではないか。

希望については「故郷」の収められた『呐喊』『自序』の中でも述べられている。

後來想、凡有一人的主張、得了贊和、是促其前進的、得了反對、是促其奮鬪的、獨有叫喊于生人中、而生人并無反應、既非贊同、也無反對、如置身毫無邊際的荒原、無可措手的了、這是怎樣的悲哀呵、我于是以我所感到者寂寞。⁽⁸⁷⁾

見·不·知·人·々·の·間·で·独·り·声·高·に·叫·ん·で·も·反·応·は·な·く·広·漠·た·る·平·原·の·中·に·取·り·残·さ·れ·た·よ·う·で·悲·し·み·が·極·ま·つ·て·「寂·寞」·た·る·思·い·に·至·る。同·じ·方·向·に·他·者·と·共·に·歩·く·こ·と·な·ど·幻·想·で·し·か·な·い。雜·誌·『新·生』·の·挫·折·を·余·儀·な·く·さ·れ·た·魯·迅·の·經·験·に·基·づ·く·悲·痛·な·る·感·懷·で·あ·る。

こ·の·よ·う·な·感·懷·は·独·り·魯·迅·だ·け·で·は·な·か·つ·た。

那·時·偶·或·來·談·的·是·一·箇·老·朋·友·金·心·異、將·手·提·的·大·皮·夾·放·在·破·桌·上、脫·下·長·衫、對·面·坐·下·了、因·為·怕·狗、似·乎·心·房·還·在·怦·怦·的·跳·動。

.....

“我想、你可以做点文章……”

我·懂·得·他·的·意·思·了、他·們·正·辦·《新·青·年》、然·而·那·時·仿·佛·不·特·沒·有·人·來·贊·同、并·且·也·還·沒·有·人·來·反·對、我·想、他·們·許·是·感·到·寂·寞·了、但·是·說……⁽⁸⁸⁾

『新·青·年』·の·編·集·に·関·わ·つ·た·錢·玄·同·た·ち·も·ま·た·荒·れ·野·で·虚·空·に·声·を·發·す·る·思·い·を·同·じ·く·し·「寂·寞」·を·感·じ·た·よ·う·で·あ·る。

“假如一間鉄屋子、是絶無窗戸而万難破毀的、里面有許多熟睡的人們、不久都要悶死了、然而只是從昏睡入死滅、并不感到就死的悲哀。現在你大嚷起來、驚起了較為清醒的幾箇人、使這不幸的少数者來受無可挽救的臨終的

苦楚、你倒以為對得起他們麼？⁽⁹⁰⁾

寸分の隙間もなく密閉された空間に閉じ込められ昏睡状態に陥っている多くの人間に誰かが呼びかけた結果、高人数人が目を覚ますとすれば、その行為は覺醒した幾人に手の施しようのない斷末摩の苦しみに遭わせるだけではないのかと、魯迅は問いかける。

“然而幾箇人既然起來、你不能說決沒有毀壞這鉄屋的希望。”⁽⁹¹⁾

これに対して幾人かが起き上がった以上は、彼らがこの鉄壁で囲まれた部屋に風穴を空ける「希望」の実現可能性を否定されるものではないのか、という具合に錢玄同は答えるのである。

是的、我雖然自有我的確信、然而說到希望、却是不能抹殺的、因為希望是在于將來、決不能以我之必無的証明、來折服了他之所謂可有、于是我終于答応他也做文章了、這便是最初的、一篇《狂人日記》。⁽⁹²⁾

この魯迅の文章は複雑である。希望がないということについては確信はあるのだけでも否定し去ることは出来ない。自分の「必無的証明」によつて彼の「所謂可有」の主張を誤っているものとして拒けることは出来ない。

然而我雖然自有無端的悲哀、却也並不憤懣、因為這經驗使我反省、看見自己了：就是我決不是一箇振臂一呼、應者雲集的英雄。⁽⁹³⁾

魯迅は雑誌『新生』の失敗を通して自分が人にひとたび号令をかければ人がそれに応じるような世に知られた傑物ではないことを痛感させられた。荒涼たる原野で独り呼びかけの声を発することの無力さを知らされたのである。

しかし魯迅の経験に基づく希望に関する「必無之証明」は蓋然性の究極について述べたものである。現在の時

点で絶無と断定しているのではない。「必無」は一定の条件を前提にして推測した極限值である。前提が異なれば、帰結も異なる。その推測の正否は一定の時間が経過した後、初めて判明する性格のものでしかない。これに対して、錢玄同は希望が「可有」である、すなわち「有」の可能性が存在すると主張する。いずれにせよ「可有」もまた「必無」と同じく蓋然性の次元でのことである。現実性から「必無」を差し引いたとき残るのが目に見えないほどの小さな「可有」ではないか。「必無」は極限值ゼロであるからこの局限された「可有」は近似値ゼロである。しかし近似値ゼロは限りなくゼロに近いが、イコール・ゼロではない。近似値ゼロが現実にはゼロそのものとなるのか、それは時間の経過をもつて初めて明らかにされる。

「必無」と「可有」のどちらの立場に立つか、それは最終的には論理的思考の積み重ねによつては決せられない。いま眼前に展開する状況は「無」であるように見える。この「寂寞」たる思いを抱かずにはいられない「無」と思しき状況において現在出来得ることは「必無」かそれとも「可有」か、どちらかを主体的に選び取ることである。魯迅は錢玄同の言葉に心中「是的」と肯つて、希望が「可有」であることに全存在を賭けたのではないのか。荒れ野を同じ方向に歩く人が多くなつたならば、確かに道が出来るであらう。果たして大勢に呼びかけてそれに応えて荒れ野を歩く人が多数現われ出るであらうか。しかし一人以上、幾人かが呼びかけに「諾」と答えることは決して不可能なことではない。応答者が一人いれば、それは最早虚空に消え行く叫びではない。少数が双数から始まるとすれば、この少数者が集まって群れをなすとき、時の経過とともにそれが多数者となり、ついには、その足跡が道をなすのではないか。

「于是我終于答应他也做文章了、」という句の中には荒れ野と思しき状況下群衆に発する錢玄同の声を自分への

呼びかけと解し、これに呼応して錢玄同と同じ方向に歩を進めることに意を決した魯迅の希望の表明が見て取れるように感ぜられる。歩く者が絶えて無いというわけでないからには、歩く者が僅かであったとしても、その少数の人間の足跡が続続と重なり合うならば、それによってもまた道はなる。錢玄同と魯迅によって残される足跡は最早一人のものではない。時間を無限に延長させるならば、極限値として道は目に見える大きさの「有」となるであろう。その鍛えられた希望の原理が「也」の中に組み込まれているように思いたい。

ここで「藤野先生」の冒頭の文に戻りたい。「東京也、無非是這樣。」とあるところの「也」とは何に對する累加なのであろうか。

松井博光「魯迅編年譜」によれば、魯迅は一八八一年（光緒七年、明治十四年）九月二十五日に紹興に生れ、一八九八年（光緒二十四年、明治三十一年）五月に南京に赴き江南水師学堂に入学し、十一月にそこを退学し、十二月に郷里にて科挙の第一次試験と言ふべき県試を受け、一八九九年（光緒二十五年、明治三十二年）に南京の江南陸師学堂附設礦務铁路学堂に入学し、一九〇二年（光緒二十八年、明治三十五年）一月にそこを卒業して三月に留学のため来日し、東京牛込にある弘文学院普通速成課に入学を許された。⁽⁹⁴⁾

魯迅は東京に落ち着く前には南京で学生生活を過ごしている。そうであるとすれば、前提となっている場所は南京のことではないか。「南京是這樣。東京也是這樣。」ということにならう。その南京はどのようであつたのであろうか。

丸山昇『魯迅』の第一章第二節「南京で得たもの」⁽⁹⁵⁾では魯迅の南京時代のことながら詳述されている。丸山は「南京行きの動機を、魯迅自身が語っているものとして」⁽⁹⁶⁾『呐喊』の中の「自序」の文を挙げている。原文はその

前の部分まで含めると次のようになる。

有誰從小康人家而墜入困頓的廢、我以為在這途中、大概可以看見世人的真面目；我要到N進K学堂去了、仿佛是想異路、逃異地、去尋別樣的人們。⁽⁹⁸⁾

一八九三年（光緒十九年、明治二六年）、魯迅が十三歳の時に祖父福清が入獄し、父鳳儀も病氣になり、一八九六年（光緒三二年、明治一九年）、魯迅が十六歳の時に父が亡くなり、一家は窮地に追い込まれた。⁽⁹⁹⁾ 彼は「我從一倍高的柜台外送上衣服或首飾去、在侮蔑里接了錢、再到一樣高的柜台上給我久病的父親買藥。」とあるように、四年余りほぼ毎日のように質屋に通って屈辱の内に得た金錢を手にもつてその足で藥屋に行き父親の藥を買って歸る生活をしたようである。少年周樹人としては一家のために何かせずにはおられなかったのではあろう。自らの将来に対して夢と希望を膨らませ人の善意を信じて疑うことを知らないはずの年頃に、容赦なく世の実相を体験させられた樹人少年の小さな胸は押し潰されんばかりであつたろうか。そのような折も折に父が他界したのであつた。当然ながら質屋通いと藥屋詣でから解放されることが出来た。十六歳と言えば志学の年を過ぎたばかりで生気まさに充溢せんという年頃である、心は空虚ではなかったが、空白であつたはずである。

南京は三国時代には呉の孫權が都を置き建業と呼ばれた由緒ある街として、中国では古い都の一つである。越の紹興からは遠過ぎない距離にある。そこにあつた江南水師学堂は「アヘン戦争後、欧米列強に何度か敗戦のうき目に会わされた清朝政府の開明的官僚が推進した『洋務運動』によって一八九〇年設立されたものであつた。」⁽¹⁰⁰⁾ というものであつたので、旧式の科挙の受験勉強では得られぬところの何ほどか新しい文明の息吹きを感じさせられるようなものを魯迅がそこに期待したとも考えられなくはない。加えて水師学堂の漢文の教授は魯迅の一族

に属し、また学生としてもそこにすでに周家の二名が名を列ねていたのである。⁽¹⁰⁾ 父親を天に送った後、行きつ戻りつ足踏み状態の魯迅が或る種の息苦しさから解放されることを願って、他者であれば青雲の志に燃える年頃の十八の春に南京に旅立つことは至極自然な成り行きであつたのではないであらうか。

しかし水師学堂は魯迅の想像したところとは懸け離れていた。それは丸山『魯迅』によれば、「洋学系統の学校とはいいながら、その受け入れ方は全く技術的なものに過ぎず、学問のやり方その他根本的な点においては、入学試験のやり方と同様、旧來のものと変つていなかったのである。」⁽¹¹⁾ というように因循姑息な体のものであつたからである。入学してわずか半年ほどしてその年の十一月に退学し、翌十二月に旧体制の登竜門の第一関門とも言うべき県試を受けている。⁽¹²⁾ 江南水師学堂の旧態依然たるさまに失望したとされる魯迅は郷里の紹興に戻り、旧制度を根幹から支える科挙を受験したのである。彼は後に激烈に儒教を批判し、アンシャン・レジームと闘つた人物である。その彼が何故県試を受験したのであらうか。県試に合格した彼はその次の段階の府試を受けることなく、再び南京に赴いた。⁽¹³⁾ 科挙の受験はそれ自身旧体制の支持を表明する意味合いを持つ。当然、科挙受験は自家撞着の行爲とならう。この問題に関してはすでに先学の高論があらうかと思われる。知識と想像力の欠如したわたくしには魯迅の内面奥深くに入り込みその強靱な思索の道筋を辿ることは不可能に近い。両刀論法の思考を際限なく重ねた後に、或いはその過程で解答を得られぬまま、内側に矛盾を胚胎した状態で抜き差しならぬ形の受験に迫り込まれたのであらうか。分からないという一語に尽きる。

彼は再び南京に戻った後、一八九九年（光緒二十五年、明治三十三年）、十九歳の時に江南陸師学堂附設礦務铁路学堂に入り、三年後の一九〇二年（光緒二十八年、明治三十五年）の一月に同校を卒業し、その三箇月後の三月に江

南督練公所から派遣されて日本に留学したのである。魯迅はすでに二十二歳の成年になっていた。この多情多感な三年の間に、丸山『魯迅』によれば進歩的であった二代め校長の俞明震に出会い、嚴復訳『天演論』などの開明思想や梁啓超の雑誌『時務報』などの改革思潮に接することが出来た。これらの人物と書物との出会いは魯迅の内面形成に大きく資するところがあったものと思われる。

「南京は這樣。」つまり「南京はこのようであった。」ということであれば、南京はどのようであったのであろうか。再び、「藤野先生」に戻る。「東京也無非是這樣。」のすぐ後は次のようになっている。

上野の櫻花爛漫の時節、望去確也像緋紅的輕雲、但花下也缺不了成群結隊的“清国留学生”的速成班、頭頂上盤着大辮子、頂得學生制帽的頂上高高聳起、形成一座富士山。也有解散辮子、盤得平的、除下帽來、油光可鑑、宛如小姑娘的髮髻一般、還要將脖子扭幾扭。實在標致極了。

「還要將脖子扭幾扭。實在標致極了。」という表現は辛辣な魯迅ならではの表現であろう。この部分に対して、竹内訳は「これで首のひとつもひねれば色気は満点だ。」高橋訳は「しかも首をひねってみたりする。まったく色気たっぷりだ。」立間訳は「そのうえ、今にも首をかしげて科を作らんばかりの風情は、なんともはお見事なものであった。」駒田訳は「これで首をひねってみせれば、まことになかなかの器量よしである。」となっている。「標致極了」を「色気云云」と訳すのは大家の公子の用いる語としては似つかわしくないように感ぜられてならない。「可愛らしい」くらいではどうだろうか。「小姑娘」と対応させるのである。

この「標致」について『大漢和辞典』巻六は第二の語義を「容貌の美しいこと。みめよい。」と記し、『元曲』『紅樓夢』『剪燈新話』の中の用例を挙げている。また、『漢語大詞典』第四巻は第五の語義を「優美；秀麗。」と記し、

『因話録』、『元曲』、『儒林外史』、『家』の中の用例を挙げている。⁽¹⁴⁾ 明清期以降の用例について見ると、『紅樓夢』第三九が「原来是一箇十七八歲極標致的・一箇小姑娘、梳着溜油光的頭、穿着大紅袄兒、白綾子裙兒……」⁽¹⁵⁾、『剪燈新話』卷一「聯芳樓記」が「顧生亦少年標致、門戸亦正相敵。」⁽¹⁶⁾、『儒林外史』第二十回が、「揭去方巾、見那新娘子辛小姐、真有沈魚落雁之容、閉月羞花之貌；人物又標致、嫁裝又齊整。」⁽¹⁷⁾、『家』二六が「好箇標致的姑娘、白白送給老頭子做姨太太、真可惜」である。⁽¹⁸⁾

これらの用例によれば、「標致」は女性だけでなく男性にも用いられる形容詞であり、瑞瑞しい若さに基づく容貌の麗しさを表すもののように感ぜられる。男女の間の情感を引き起こすような形態的特徴を指していないように思われた。わたくしは年来の畏友李少勤氏にこの語について尋ねてみた。李さんは南京出身の香港市民で普通話、広東語、英語、日本語に堪能である。一橋大学の学部と大学院で社会学や地理学を学ばれた後、香港に戻り香港貿易發展局 (Hong Kong Trade Development Council) の代表団の通訳のお仕事などでたびたび来日された。言葉の表層的な意味だけでなく、深層のニュアンスまで掘り下げられようとする李さんは中国文学にも通じ、在学時代にしばしばご教示を仰いだ。文学好きの李さんが日本では中国文学のことを専門として研究されないのが不思議なくらいだった。

二〇一三年十月三十一日付けの李さんからの返書によれば「簡単なことばで誰でもわかることばです。但しいろんな状況につかうから、日本語や英語にぴったりアタルことばは無いように思います。prettyとか handsomeの意味、主に若い女性の外觀――傍線、李氏注――に使いますが、若い男性や物に使ってもおかしくありません (フランスの自動車 Pigeot (ピエ) は H.K. では『標緻』とします。漢字から見ると、標↓標準、致↓極、おそらく一

般の中国人は「基準の極」として理解しているでしょう。：『色気がある』との日本訳では、皮肉なニュアンスを訳しすぎたような気がします。あえて文脈なしで訳すならば「ぬきんでる」の方がよいのではないのでしょうか。急に『かつこう良い』を思い出しましたが、これと『ぬきんでる』とのまん中のことばは日本語にないでしょうか？この『標緻』は中国人にアイマイなことばではありません。意味ははっきりしてますが、反訳するときには困ることばです。Taget languageに見あたらないからです」ということであつた。委曲を尽くした解説にわが意を得たりと胸を撫で下ろす思いがした。

丸山昇『鲁迅』によれば、「当時留学生の多くは、辮髪を切らず、頭の上に巻き上げ、その上に帽子をかぶるため富士山のように見えた。彼らの大部分は、法律、経済を学び、国に帰って役人になることを目的としていた。革命を唱える留学生の中にも、革命そのものより革命後の新政府で重要なポストにつくことの方に關心のあるものが少なくなかつた。⁽¹⁰⁾とあるように、清末期の日本留学生は故国に帰って清朝政府の官僚になることを目指していたり、或いは革命が成功した暁には革命政府の役人に登用されることを目論んだり、保守、革新の多くがいずれも立身出世を求める類であつて、鲁迅はこれらの人士に対して隔たりを感じていたようである。⁽¹¹⁾それが「嫌悪感」と呼べるものなのかはわたくしには分からないが、彼らへの気持ち「實在標致極了」という言葉に凝縮されているのであろう。憫笑の念を抱いていたのであろうか。ただそれは淡泊なものではなく、皮肉の込められた煮えたぎるような強烈なものであつたのではないか。

このような清国留学生を目の当たりにした鲁迅は新式の洋学を教える南京の学校においても個人の栄達願望に駆られた人間が学んでいたことを思い出したことであつたろう。日本にいる清国留学生との距離感、南京の洋式

学校に学んだ学生との距離感を媒介に増幅されたものではなかったのか。

それだけではなかった。竹内好『続 魯迅雜記』によれば、「ことに、魯迅の留学する少し前に改革派と革命派の指導者がそろって日本へ亡命して来て、東京や横浜を本拠にして宣伝活動をやっており、祖国の将来をになうという読書人的プライドから、多くの留学生がそれに参加していた。」⁽¹²⁾とあるように、中国の政治的派閥の一部がそのまま日本に並行移動しており、日本の中の小宇宙に中国の政治の舞台が展開していたのである。この政治の舞台に日本留学生も様々な形で登場していたようである。というのも、「留学生だけで一つの社会を構成していた。留学生は、官費生も私費生も、ほとんど全部が読書人の子弟である。自国にいたときのように、民衆と直接生活がふれあう条件はない。また、家族関係からも脱却している。彼らを取りまく環境は、一応まがりなりにも近代国家の体裁をととのえつつある日本である。身分意識がうすれ、職業や転居が自由で、教育が普及し、交換経済が日常生活にまで浸み込んでいる、といった社会である。この自国との落差は否応なく目にはいる。⁽¹³⁾……そのような事情から、留学生の社会は一般的には政治意識が高い。ことに、魯迅の留学する少し前に改革派と革命派の指導者がそろって日本へ亡命して来て、東京や横浜を本拠にして宣伝活動をやっており、祖国の将来をになうという読書人的プライドから、多くの留学生がそれに参加していた。」とあるように、近代国家日本と前近代王朝清国との隔たりを認識し自覚した留学生は政治運動に関わるようになったようなのである。

但し、ここで「祖国の将来をになうという読書人的プライド」からや「自国との落差」という表現には些か抵抗がある。前者については既に述べたのでここでは後者について触れたい。中国は一八四二年のアヘン戦争以後、次第に欧米に大幅に門戸を解放するようになったからである。これにより欧米人宣教師の来華が加速された。彼

らはキリスト教を主軸にして西洋の文化、文明を中国にもたらした。地大物博の中国はただちに近代国家とはなり得なかったけれども、東アジアで宣教師を通して逸早く正面から西洋文明を受容したのである。他方、日本は一八六八年の明治維新により近代国家の体裁だけは整えたものの、キリスト教の禁教令は一八七三年になってようやく現実的に撤廃されたのである。日本は明治時代に入ってもしくはばらくは宣教師が近代文明の精華を紹介し伝達するのに適した十分な環境が整えられていなかった。⁽¹³⁾一九世紀の東アジアにおいて西洋文明を大々的に吸収したのは中国であった。その西洋文明の有力な伝達者の重要な部分を形成する主体がキリスト教の宣教師であった。彼らはまず中国に伝道の拠点を置いた。次に国際情勢の変化とともに日本にも伝道の拠点を築いた。その結果、中国から日本へという宣教師の人的資源の流れが生じた。その典型的人物にヘップバーン（ヘボン）（Hepburn）などがいた。日本は鷗外の言葉を借りれば「普請中」であり、社会のあちこちに近代的なものと前近代的なものとが混在し、両者の間に軋みが生じていたであろう。物質的な近代社会に適合する近代精神が形成されてはいなかった。言うなれば、新しい革袋は用意されたが、新しいぶどう酒はまだなかった。万人が生まれながらに平等であることをキリスト教思想とは独立した形で教示した福沢諭吉の『学問のすすめ』を時代が必要とした所以である。

しかし日本は一八八九年に大日本帝国憲法が公布され、それにより世襲制の華族制度が設けられた。平等な市民から構成されるべき近代的な市民社会への移行を自ら放棄したのである。天皇に議会の承認を必要としない大権を認めた人民不在の憲法は日本の近代をその根底から挫折させた。⁽¹⁴⁾日本は市民社会国家の過程を経ずして一足飛びに帝国主義国家となり、アジア侵略に踏み出して行った。⁽¹⁵⁾一方、中国は体制こそ前近代のそれであったが、

宣教師が活躍する場が広く認められ、万人平等の市民社会国家の思想を受け容れ易い思想的な素地が形成されていたのではないであろうか。中国と日本との間にあったのは量的な「落差」などではなく、質的な「差異」、或いは非対称性であると思われてならない。

このような日本留學生の政治運動への積極的な参加が洋学を教える南京の官立学校で學生たちの間に、同じように存在したとは推測し難い。東京には南京にいたときと同じように立身出世を志向する學生がいた。それだけではなかった。そこにはさまざまな派閥の政治運動があった。この政治運動に中国人留學生の中から自ら進んで参加して行く者も現れた。留學生は自らの拠って立つ政治的立場を明らかにする必要に迫られるようになって行ったことであろう。

「A也無非是B」という句は單なる論理計算の帰結として「A=B」を表わしているのではないのか。それは「A∪B」、つまり集合Bは集合Aに包摂されるという含意があるように感ぜられる。集合Aには集合Bにないものがあるわけなのだ。東京は南京と同じところもあるが、それだけではなかったということになる。留學生が守旧派、改革派、革命派などの派閥闘争に捲き込まれて進むべき道を見失うという五里霧中の状況に置かれていたことを「東京也無非是這樣。」という文は物語っているのではないか。

しかし旗幟を鮮明にするための条件が整っていなかった。「大体、留學生一般の思想状況そのものが、まだ極めて雑多な要素を中に含んだものであった。……つまり、それぞれが雑多な動機と様々な発想で、中国の未來像を自己の進路を考えている。それらに共通なものとして、漠然とした革命ないし改良の空氣がある、というような状況だったと考えてよい。」とあるように留學生の思想的な状況が諸要素の入り混じった不分明なものであつ

たし、「……留学生界そのものとともに、革命を目指す流れそのものが、混沌期にある。……中国革命に即していえば、一九〇五年、孫文を中心とする広東派、章太炎を中心とする浙江派、黄興を中心とする湖南派が大同団結して、中国革命同盟会が成立したことによって、初めて中心的な運動主体が形成されたのである。」とあるように革命運動が統一戦線を形成するのが容易でなかったからである。中国革命同盟会はようやく一九〇五年(光緒三十一年、明治三十八年)、に魯迅が仙台医学専門学校に入学した翌年に成立を見た。魯迅が弘文学院を卒業した一九〇四年にはまだ出来上がっていないのである。

但到傍晚、有一間的地板便常不免要咚咚地響得震天、兼以滿房煙塵闐亂；問問精通時事的人、答道、那是在學跳舞。⁽¹⁸⁾

中国留学生会館の一室は夕方になると決まって「ドン、ドン」という大きな音がし、会館の中はほこりが乱舞する。「時事に精しい人物(精通時事的人)」に尋ねると、「あれはダンスの勉強の最中さ(那是在学跳舞)」という答えが返って来た。ここで言う「時事」とは政治運動のことではないか。「ダンスの勉強」とは進むべき道について議論が昂じて留学生同士、組んず解れつのつかみ合いの喧嘩になっていることを指していよう。「学跳舞」とは皮肉のこもった一種のユーモアとして解してみたいのである。

つまり、政治運動に関して毎日甲論乙駁せずんばやまぬ切羽詰った思想的な状況が東京にいる中国人留学生の間にあり、それにもかかわらず、受け手の側の政治運動、なかでも革命運動のほうは流動的で心ある留学生を受け容れるだけの態勢が整えられていなかったのではないであらうか。⁽¹⁹⁾

到別的地方去看看如何呢？⁽²⁰⁾

確たる答えの見出せぬまま、魯迅は「どこかよそに行ってみたらどうだろうか。」と呻き声に似た問いを自ら發するのであった。丸山昇「魯迅とその時代」によれば「彼はこの普通速成科を○四年四月に卒業すると、九月、仙台医学専門学校に入学した。本来は東京帝大の工学部採鉱冶金工学科に入学すべきものだったのを、自分の意思で医学を選んだのだという。」⁽¹¹⁾とあるように南京で学んだ工学を活かすことなく、自ら考えるところがあつて医学の道を選んで仙台に赴いた。

然而我也顧不得這些事、終於到N去進了K学堂了、在這学堂里、我才知道世上還有所謂格致、算學、地理、歷史、繪圖和体操。生理學并不教、但我們却看到木版的《全体新論》和《化学衛生論》之類了。⁽¹²⁾

彼は南京の江南水師学堂や礦務鐵路学堂で初めてヨーロッパの学問に触れた。そこで彼は『全体新論』や『化学衛生論』などの本を目にすることが出来た。これは科挙の受験勉強のための四書五經の儒教の世界とは明らかに異質なものであった。このうち、『全体新論』は浦山きか「魯迅と医学——十全なる知への憧憬」に附された「魯迅の購入・所蔵書目表（医經・經方、西洋近代医学関連）」の中にも入っていて、「購入年月日」の欄には「不明」とあり、「備考」には「『呐喊』自序に書名引用。「魯迅研究月刊」二〇〇四年一月「魯迅所蔵古籍漫談」所載。」とある。また陳邦賢『中国医学史』によれば、「道光二四年（一八四三）に英国人ホブソンは香港の病院で中国人に医学を教授し、英文医学書を中国語に翻訳した。全部で『全体新論』（解剖生理学）、『西医略論』（實際は外科臨床実験を専述）、『婦嬰浅説』（看護法と小兒病）、『内科新説』（内科臨床と藥物概論を含む）などがある。」とあるように、『全体新論』は英国人ホブソンの手になるものであった。

英国人医師ホブソンは、吉田寅「宣教師刊中国語医学書と関連資料」所載の「ホブソンの生涯と中国語著作」

によれば、一八一六年英国のウエルフォードに生まれロンドン大学を卒業して後、ロンドン宣教会に入り、後に中国医療伝道会 (The Medical Missionary Society in China) ⁽¹⁸⁾に移り、中国滞在約二十年の長きにわたって医療伝道に尽力し、中国語を用いてキリスト教と医学などの自然科学に関する著作を世に送った。一八五九年に帰国し、一八七三年にロンドンの郊外にて天に召されたということである。⁽¹⁹⁾

ホブソンの漢文著作の『全体新論』は吉田寅「『全体新論』の内容とその特色に」よれば、初版が一八五一年(咸豐元年)に広東の恵愛医館より刊行された。同書は西洋医学の解剖学に関するものであるが、中国の医学の伝統を評価しつつ、中国の医学の不充分なところを補うために中国の知識人の協力者陳脩堂を得て出来上がった。⁽²⁰⁾同書は吉田寅「中国における反響」によれば、中国の医学界からだけでなく、中国の知識人及び中国に滞在する欧米人からも高く評価されたものであって、一九世紀末になっても中国の青年の間で読まれたようである。⁽²¹⁾魯迅は若き日に『全体新論』に出会い、後に自ら入手して蔵書としたわけである。魯迅の思想世界において『全体新論』の占める位置は決して低くはないであろう。

起初有幾本是線装的；還有翻刻中国譯本的、他們的翻譯和研究新的医学、并不比中国早。⁽²²⁾

藤野巖九郎は解剖学の講義に日本で翻刻された中国語の医学書を持参した。吉田寅「日本における反響」によれば、「一八五〇年代に中国で刊行されたホブソンの中国語医学書は、やがてわが国にも舶載され、翻刻もしくは和訳が行なわれて、幕末明治初年における黎明期日本の西洋医学界に大きな影響を与えたこととなった。」⁽²³⁾とあるように、ホブソンの一連の医学関係の漢文著作は幕末期に日本で翻刻され、日本の西洋医学の前進に貢献した。これらのうちで『全体新論』の翻刻が一八五七年(安政四年)に最初に、伏見の医師越智氏によって出され

ている。⁽¹¹⁾「わが師と認める人(我所認為我師的)」の携えたその翻刻本の中の一つにホブソンの『全体新論』が入っていたのではないであらうか。

日本の西洋医学研究は「并不比中国早」——「別段、中国より早かつたわけではない」と訳せようか——という魯迅の認識は吉田寅のホブソンに関する研究を参考にすれば、この時点で正確な洞察であつたと言えるのではないか。解剖学に関する知識の上では魯迅は仙台医專の同級生より一頭地を抜いていたことであらうし、また西洋医学の東洋への移植については藤野巖九郎も具有せぬ知見を有していたとも考えられよう。

我還記得先前的醫生的議論和方藥、和現在所知道的比較起來、便漸漸的悟得中醫不過是一種有意的或無意的騙子、同時又很起了對於被騙的病人和他的家族的同情；⁽¹²⁾

魯迅は西洋医学の『全体新論』などを通して次第に漢方医学の教えるところが虚妄であると認識するようになった。これは父親の病氣のために入手し難い冬の葦の根などを薬として処方され、薬効空しく志学の頃に父を亡くした魯迅の実体験に基づく感懷であつたらう。⁽¹³⁾

ホブソンは『全体新論』の「自序」の中で次のように述べる。

夫醫學一、道。工、夫甚鉅。關繫非ス輕。不レ知ニ部位一者。即チ不レ知ニ病一源一。不レ知ニ病一源一者。即チ不レ明ニ部位一者。即チ不レ知ニ病一源一。不レ知ニ病一源一者。即チ不レ明ニ治一法一。不レ明ニ治一法一者。即チ不レ明ニ平一常一之藥一。猶レ屬セン不レ致ニ大害一。若シ捕レ風捉レ影。以レ藥試レ病。將レ有ニ不レ忍レ言一者一矣。然ルニ以ニ中一華一、大、國一。能一者固ヨリ不レ乏カラ。而庸醫碌一碌。惟利是圓者。亦指不レ勝レ屈。深ク為ニ惜レ之。⁽¹⁴⁾

魯迅は西洋医学が病氣の源に対して有効な治療方法を体系的に確立するものであることを述べたこの序文に接

して、父親の病氣を診た名立たる漢方医が理性をもってしては解するのに苦しむところの入手し難い、それゆえに高額であろう薬を処方するだけで、病氣の原因を突き止めてこれを根治することを知らなかった姿を思い浮かべたのではないか。理論的な方法論をもって対象に向き合うことを教える『全体新論』のこの序文は単に漢方医学への漠然たる懷疑であつたものを方法的懷疑 (doute méthodique) に比定され得るものに練り上げるだけの明晰さをもって魯迅に迫りはしなかつたであらうか。仙台への道のりは決して遠くはなかつたのである。

注

- (70) 『魯迅全集』(人民文学出版社、一九八七年) 第二卷、三〇二頁(今回より一九八七年版を用いる。神戸の古書肆より入手出来たからである。内容は一九八二年版と同様と聞く)。
- (71) 竹内好訳『魯迅文集』(築摩書房、一九七六年) 第二卷、一四七頁。
- (72) 「世界の文学47」『魯迅』(高橋和巳訳) 中央公論社、一九六七年、三四五頁。
- (73) 『魯迅全集 3』「野草・朝花夕拾・故事新編」(訳者「代表」立間祥介) 学習研究社、一九八五年、一六九頁。
- (74) 魯迅「阿Q正伝・藤野先生」(駒田信二訳) 講談社、一九九八年、二五九頁。
- (75) 『魯迅全集』(人民文学出版社、一九八七年) 第一卷、四八五頁。
- (76) 前掲竹内訳『魯迅文集』(一九七六年) 第一卷、九七頁。
- (77) 前掲高橋訳『魯迅』、七二頁。
- (78) 『魯迅全集 2』「呐喊、彷徨」(訳者「代表」丸山昇) 学習研究社、一九八四年、九二頁。
- (79) 前掲駒田訳『阿Q正伝・藤野先生』、七九頁。
- (80) 商務印書館辞書研究中心編『古今漢語詞典』 商務印書館、二〇〇〇年、一五二〇頁。
- (81) 同辞典、同頁。

- (82) 前掲竹内訳『鲁迅文集』第一卷、九七頁。
- (83) 前掲高橋訳『鲁迅』、七二頁。
- (84) 前掲丸山訳『鲁迅全集』2、九二頁。
- (85) 前掲駒田訳『阿Q正伝・藤野先生』、七九頁。
- (86) わたくしは一九七四年、七五年の大学一、二年時に小平の教室で木山英雄先生から中国語を学ぶという学恩に浴した。一年めのテキストは菊田正信・木山英雄・傳田章・戸川芳郎編『中文語法』（大修館書店、一九七四年）であった。テキストを学び終えると、毛沢東「文芸講話」「引言」の部分の講読が待っていた。二年めには最初に艾蕪「偷馬賊」という作品を読み、次に周作人の随筆に移った。それらのうちのどれであつたか覚えていないが、そこに「其実」という語が出て来た。わたくしは「そのじつ」とそのまま訓読みすると、木山先生は「しかし」と訳すように教えられた。中国語の学習には倉石武四郎『岩波中国語辞典』を用いていた。当時のものが見当たらないので、一橋大学図書館所蔵（一橋大学附属図書館小平分館印）の印あり）の一九六三年第一刷の「其実」の項を見ると、「実際は、本当は。」（四四三頁）とある。何故「しかし」となるのかよく分からないまま、こういうことが二、三度、或いはそれ以上あつたように思う。愚鈍なわたくしはいつも同じように直された。以後この語に出会うたびに「しかし」という訳語が思い浮かぶようになり、現在に至っている。ただ今からは四十十年前のことになる。記憶に誤りがないとも言えない。断言を憚かる。今回『中文語法』、『文芸講話』、『偷馬賊』をいま一度眺めてみたが、「其実」という話に辿り着かなかつた。「偷馬賊」については作者名を思い出せず、忝くも中国社会科学院文学研究所教授趙京華先生から艾蕪であることをご教示していただいた。記して感謝す。
- (87) 『鲁迅全集』人民文学出版社、一九八七年、第一卷、四一七頁。
- (88) 同全集、同卷、四一八頁―四一九頁。
- (89) 前掲人民文学出版社『鲁迅全集』第一卷の四二二頁の注（一四）によれば、「金心異」とは錢玄同のことを指す。彼は「エスプラント」の採用を主張し、のちにはローマ字化運動の先頭に立ち、教育部国語研究会（二七）、国語羅馬字拼音研究委員会（二三）の委員を歴任した。前田利昭「錢玄同」丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版、一九八五年。（一六〇頁）人物で、中国語の表記方式の改革にも深く関つたようである。
- (90) 前掲人民文学出版社『鲁迅全集』、第一卷、四一九頁。
- (91) 同全集、同卷、同頁。

- (92) 同全集、同巻、同頁
- (93) 同全集、同巻、四一七—四一八頁。
- (94) 松枝茂夫・竹内好編『魯迅選集』第十三巻、岩波書店、一九六四年、二〇六—二二七頁。尚、丸山昇『魯迅—その文学と革命』(平凡社東洋文庫、一九六五年、二三八—二四八頁)にも「魯迅略年譜」が収められている。わたくしはこの略年譜を通して松井編の年譜を知った。拙文は略年譜によつて少し補っている。更に『魯迅全集』第十六巻に「魯迅著訳年表」(一—四〇頁)が収められている。これについては知ったのが時期的に遅く、本文を書くうえで充分に活かされてはいない。不明の至りである。
- (95) 丸山前掲書、二六—三六頁。
- (96) 同書、二六頁。
- (97) 同書、同頁。
- (98) 前掲人民文学出版社『魯迅全集』第一巻、四一五頁。
- (99) 前掲松井「魯迅年譜」『魯迅選集』第一三巻、二二—二二二頁。
- (100) 前掲人民文学出版社『魯迅全集』一巻、四一五頁。
- (101) 前掲丸山『魯迅』、二九頁。
- (102) 同書、二八頁。「ここには仁房の椒生が漢文の教授兼監督(学監と舍監を兼ねたような任務)をしており、その関係で、最初成房の鳴山が、次いで魯迅の一年前には、父の異母弟、魯迅の叔父に当たる伯升がはいっている。」(同頁)とある。
- (103) 同書、三〇頁。
- (104) 前掲松井「魯迅年譜」『魯迅全集』第十三巻、二二四頁。
- (105) 前掲丸山『魯迅』同書、三二頁。
- (106) 前掲松井「魯迅年譜」『魯迅選集』第十三巻、二二五—二二七頁。
- (107) 前掲丸山『魯迅』三二頁。
- (108) 前掲人民文学出版社『魯迅全集』第二巻、三〇二頁。
- (109) 前掲竹内訳『魯迅文集』第二巻、一四七頁。
- (110) 前掲高橋訳『魯迅』、三四五頁。

- (111) 前掲立間訳『鲁迅全集 3』、一六九頁。
- (112) 前掲駒田訳『阿Q正伝・藤野先生』、二五九頁。
- (113) 『大漢和辞典』巻六、五二九頁。
- (114) 『漢語大詞典』第四巻、一二六五頁。
- (115) 曹雪芹『紅樓夢』校注本 二『北京師範大学出版社、一九八七年、六二〇頁。』『紅樓夢』のこの文は「藤野先生」の原文の「…油光可鑑、宛如小姑娘的髮髻一般、…」の部分想起させる。伊藤漱平訳では「なんとそれが年齢のころ十七、八のとびきりべっぴんのお嬢さまなので、はい。頭髮をてかてかに結び上げ、緋の長上衣に白綾子の裳をつけて……」（平凡社中国古典文学大系『紅樓夢（上）』一九六九年、五三九頁）とある。鲁迅は清国留學生が弁髪を頭にぐるぐる巻いているのを皮肉をこめて表現しようと思案を重ねた後に、中国でよく読まれている『紅樓夢』の中のこの箇所表現がそれと知ることなく思い浮かんだのであろうか。或いはそれと意識したうえで、読者が『紅樓夢』の一節も併せて連想する効果を秘かに期して「藤野先生」の中の表現を絞り出したのかも知れない。
- (116) 瞿祐『剪燈新話』巻一「聯芳樓記」世界書局、二〇一二年、一一頁。
- (117) 吳敬梓『儒林外史』（黃小田評本、李漢秋輯校）第二十回、黃山書社、一九八六年、一八八頁。
- (118) 巴金『家』人民文学出版社、一九八一年、二三三頁。
- (119) 前掲丸山『鲁迅』、四六頁。
- (120) 同書、四六―四七頁。丸山はここで周作人の記述を取り上げている。後出の「参考文献」の欄（二二九頁）に挙げられた『鲁迅的故家』第三分「鲁迅在東京」一三「『眼睛石硬』」（人民文学出版社一九八一年、一七三―一七四頁）や『鲁迅的青年時代』二「東京与仙台」（河北教育出版社、二〇〇二年、三二―三三頁）などが念頭に置かれているのであろうか。たとえば後者には、「一般留學生又覺得五年的期間很短、一会儿就要回去、如果剪了頭髮、一時不能留得起來、所以仍多留着辮髮、只把它盤起來、用制帽蓋住。……及至看見了這些『富士山』的情形、着實生氣、……」（三三頁）とあった。
- (121) 竹内好『歴史における鲁迅』『続 鲁迅雜記』頸草書房、一九七八年、二〇頁。
- (122) 同書、一九―二〇頁。
- (123) この間の消息はたとえば顧長声『伝教師与近代中国』（上海人民出版社、一九八一年）やK. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China* (The Macmillon Company, 1929) など詳しくであろう（両者―特に後者―の邦訳が俟たれ

るところである)。尚、大貫隆他編『岩波キリスト教辞典』(二〇〇二年)の中の薛恩峰「中国のキリスト教」(七四二―七四三頁)と鈴木範久「日本のキリスト教」(八五三―八五四頁)などの解説が簡にして要を得ており、大いに参考となった。

(124) 高野真澄「大日本帝国憲法」伊藤正己編集代表『国民法律百科大事典』第五卷(ぎょうせい、一九八四年、三六五―三六七頁)、「華族」吾妻栄編集代表『新版新法律学辞典』(有斐閣、一九六七年、二六頁)、「大権」佐藤幸治他編修代表『コンサイス法律学用語辞典』(三省堂、二〇〇三年、一〇三三頁)等を参考にした。

(125) 近代日本のアジアへの武力進出を同時代人として目撃していたホブソン(J. A. Hobson)の『帝國主義論』(石沢新二訳)(改造社、一九三〇年(覆刻版、一九七七年)。一九〇二年初版の翻訳)第二編第五章「アジアに於ける帝國主義」の中に、「ヨーロッパにとつては利益の目的の爲めに暴力に依つてアジアを支配し、而して、ヨーロッパはアジアを文明化しつゝ、あり且つアジアを精神生活のヨリ高い水準に高めつゝ、あるというふ口實に依つて、その支配を正當化する。」(四〇一頁)とある。遅れて帝國主義となった日本はこの「ヨーロッパ」の一員と化して客体としてのアジアを侵略するに至つたと言えよう。尚、吾妻栄『新版新法律学辞典』の「侵略」の項には、「兵力によつて自国の利益を積極的に増進するために攻撃的に出ること。」(六七七頁)とあつた。

(126) 前掲丸山『魯迅』、四四頁。

(127) 同書、四八頁。

(128) 前掲人民文学出版社『魯迅全集』第二卷、三〇二頁。

(129) 前掲丸山『魯迅』には、「すなわち、魯迅は、一九〇三年秋から、光復会の企てに参画し、一九〇五年正式に結成された際にもこれに加入しているわけである。」(五四頁)とある。これによれば、弘文学院入学二年めの年に革命運動への参加の姿勢を明確なものにしたことになる。ただ光復会は革命に向けての一つの地方派閥組織の色が濃い。当然他の派閥組織との間で争いも生じ得る。最終的な革命の実現に向けて展望が開かれない状況では内面の不均衡状態は解決されず、進退谷まることに行き着く。

(130) 前掲人民文学出版社『魯迅全集』第二卷、三〇二頁。

(131) 魯迅・東北大学留学百周年史編集委員会『魯迅と仙台 東北大学留学百周年』東北大学出版会、二〇〇四年、一四頁。典拠は記されていないように思う。

(132) 前掲人民文学出版社『魯迅全集』第一卷、四一六頁。

(133) 中嶋先生退休記念事業会編『中国の思想世界』イズミヤ出版、二〇〇六年、三八四頁。韋力「魯迅所藏古籍漫談」は『魯迅研究月刊』二〇〇四年第二期のものを含めて福建教育出版社から二〇〇六年に上下二冊の形で出た韋力『魯迅古籍藏書漫談』という本としてまとめられたのではない。尚、同書の存在については愛知大学名古屋図書館職員の方にご教示いただいた。記して感謝す。

同書の上巻の「子部」には「五、医家類」の項目（一八二—一八八頁）があり、晋の王叔和の『脈経』、隋の巢元方等の『巢氏病源』、北宋の王惟一の『新刊補注銅人腧穴針灸図経』、北宋の寇宗奭の『本草衍義』、清の亟斎居士の『達生編』、そして英国人ホブソンの『全体新論』が記してある。吉田寅「『全体新論』の内容とその特色」によれば、初版が一八五一年に広東の恵愛医館から出、同じ年に別の版が上海の墨海書館より出ている（前掲吉田『宣教師刊中国語医学書と関連資料』、二二頁）。魯迅が所蔵したものは墨海書館から出たものである。この六種の書籍のうち、ホブソンのもののみが同国人でない者による西洋医学の本である。かつて医学生であった魯迅の内面世界における『全体新論』の占める位置の低からざることを物語るものではないだろうか。

(134) 陳邦賢『中國醫學史』第三篇「近世醫學」第五章「清代的醫事教育」第一節一節「外人教授華人醫學」臺灣商務印書館、一九五八年、二二二頁。

(135) 「幕末期医学書復刻」第Ⅱ期『ホブソンの医学書』全五冊（冬至書房、一九八六年）に解説として附された小冊子の吉田寅「中国医療伝道とホブソンの中国語医学書」（教育出版センター）の第一章「中国医療伝道の開拓」（三—七頁）に「中国医療伝道会」のことが詳述されている。

(136) 吉田寅編『宣教師刊中国語医学書と関連資料—中国プロテスタント初期医療伝道の資料的考察』〔立正大学東洋史研究資料Ⅶ〕立正大学東洋史研究室、一九九七年、一七—二二頁。

(137) 吉田前掲書、二一—二七頁。

(138) 同書、四五—五〇頁。

(139) 前掲人民文学出版社『魯迅全集』第二卷、三〇三頁。

(140) 吉田前掲書、五〇頁。

(141) 同書、五〇頁、五七頁。

(142) この部分に対して、竹内訳は「かれらは決して中国より早くはない。」（前掲『魯迅文集』第二卷、一四九頁）、高橋訳は「中

国より早かったわけでは決してない。」(前掲『魯迅』、三四六頁)、立間訳は「中国より早く始められた訳ではなかったのだ。」(前掲『魯迅全集』3、一七一頁、駒田訳は「中国にくらべて決して早くはないのである。」(前掲『阿Q正伝・藤野先生』、二六一頁)である。「并」の箇所について立間訳は該当部分が見当たらないように思われるが、他の訳はいずれも「決して」となっている。愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』(大安、一九六八年)は「并」の第四の語義を「決して、いっように、さほど、べつに、とりたてて」(一一一頁)とし、「ただし、その否定の強調には、決して、から、さほど、まで意味に幅がある。」(同頁)と但し書きを付している。この場合「決して」を用いて真正面から否定を強めるよりは、一步退いて「別段」くらいに訳したほうが皮肉の気分が込められるように感ぜられた。

(143) 前掲人民文学出版社『魯迅全集』第一巻、四一六頁。

(144) 「…因為開方的医生是最有名的、因此所用的藥引也奇特：冬天的蘆根、經霜三年的甘蔗、蟋蟀要原対的、結子的平地木、…多不是容易辦到的東西。然而我的父親終于日重一目的亡故了。」(同書、同巻、四一五頁)

(145) 合信『全體新論 乾』(秋田屋太右衛門、一八五七年)〔安政四年〕「序」、一葉裏(愛知大学豊橋図書館所蔵)。

追記

本文を書き終えて後、丸山昇訳『阿Q正伝』(新日本出版社、一九七五年)、増田渉訳『阿Q正伝』(角川書店、一九六一年初版、一九七三年三六版)、増田渉訳『阿Q正伝』(東西出版社、一九四六年)、松枝茂夫訳『朝華夕拾』(東西出版社、一九四七年)、松枝茂夫訳『阿Q正伝・狂人日記』(旺文社、一九七〇年初版、一九七三年重版)を入手した。後の四冊は札幌の古書肆花鳥書店から購入したものである。店主の花鳥徳夫さんはかつて和光大学にて丸山昇先生から中国文学を教わったお方である。お蔭で丸山先生ご所蔵の本を頂戴することが出来た。また花鳥さんから丸山先生が状況に翻弄されることなく誠実にご自分の問題関心を持ててご研究を貫かれたむねのことをうかがった。理解力不足の点は諒とされたい。記して感謝する。

丸山昇先生には『魯迅・文学・歴史』(汲古書院、二〇〇四年)というご著書があり、逝去後『丸山昇遺文集』全三冊(汲古書院、二〇〇九年―二〇一〇年)が編まれていることを校正の最終段階で知るに至った。不明の極みである。書名をここに記すだけでも意味があると思われる。諒とされたい。

これらの訳書について「藤野先生」冒頭の「東京也無非是這樣。」の該当箇所を見てみたい。丸山訳では「東京も似たよう

なものだった。」(一四九頁)、増田訳では「東京はおよそこんなふうであった。」(東西、一六二頁)、「東京も別に変わりはなかった。」(角川、一四九頁)、松枝訳では「東京もそんな風でしかなかった。」(東西、一三九頁)、「東京もたいして変わりばえはしなかった。」(旺文社、一五九頁)となっている。

旺文社文庫の松枝訳には、この箇所について注(1)が付されていて、「『藤野先生』の一編は魯迅の自叙伝『朝花夕拾』十章中の第九章で、この冒頭の一句は直接前章に接続している。魯迅は郷里の紹興の不愉快な空気に耐えられなくなり、母の許しを受けてついに南京に出たが、そこあまり香ばしい環境ではなかった。どうやらその地の鉱山鉄道の学校を卒業したのだが、将来の目鼻もつかぬので、日本留学試験にパスして東京に來たのだが……。」(一五九頁)とある。

『朝花夕拾』では「藤野先生」の前に「瑣記」という作品が置かれている。この「瑣記」の訳は東西出版社の『朝華夕拾』の中にも収められている(一一九—一三三頁)。ここではやむにやまれず紹興から南京に脱出したこと、南京では最初江南水師学堂で学び、次に礦務鐵路学堂に入り直したこと、日本への派遣留学が決定したことなどが書かれている。

松枝注は「瑣記」と「藤野先生」を連続した一つの作品の前半と後半と捉える視点を提供するものである。「瑣記」の松枝訳文を読んでみてその思いは強くなる。拙文は「瑣記」について顧慮することを知らずに書いたものである。考察が不十分であることは言うを俟たない。

ただ、敢えて蟪蛄の斧を許していただければ、表題の備わった作品であるからには、「藤野先生」という文章を独立に取り出したとしても鑑賞し得るように、一編の文章として緻密に構成されていると見る余地も残されているのではないか。書き出しを指示代名詞で始める措辞は斬新な修辭として表現の可能性に挑戦する試みではないかと考えてみたいからである。

次に「故郷」の最後の文の「其実地上本没有路、走的人多了、也便成了路」の箇所について如上の訳書の該当箇所について見てみたい。丸山訳では「じつは地上にはもともと道はない、歩く人が多くなれば、道もできるのだ。」(新日本、五八頁)、増田訳では「実際は地上にはもともと、路というものはなかったのを、歩く人が多くなつて、そこが路になつたのである。」(角川、四七頁)、松枝訳では「もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」(旺文社、五八頁)となっている。丸山訳は学研『魯迅全集』の訳と同じである。増田訳と松枝訳には「也」の訳に該当する部分は見られないように思われる。

付記

「故郷」の「也」については愛知大学名誉教授保住敏彦先生の提唱によって始められた読書会「土曜会」の第八回二〇一二年秋十月二七日に『西国立志篇』を読む」というタイトルでお話をさせていただいたときに着想を得た。保住先生と「土曜会」参加者各位に感謝するものである。